

特集「東アジアの民俗学 —— 歴史と課題 ——」 趣旨説明

菊 地 暁*

東アジアにおける民俗学は、少なく見積もっても、すでに一世紀にわたる歴史を有している。日本列島で、朝鮮半島で、台湾島で、中国大陸で、民俗学的探求は、それぞれの風土と歴史に支えられ、ときに順調に、ときに困難をともないつつ、学問的成果を蓄積していった。そうした蓄積をしっかりとリスペクトし、その批判的継承をはかることが後学の責務だろう。

そしてそのためには、ある素朴な疑問との対峙を避けることはできない。ここでいう「民俗学」が、はたしてどこまで「同じ」なのか、と。「民俗」という概念とそれをめぐる方法、国家と民族と言語の関係、学知ないしはアカデミズムのあり方、国内外の政治体制との関わり…、「民俗学」という営みを支えるファクターは多様であり、複雑だ。

誤解を恐れずにいえば、本シンポは、「東アジア民俗学」なるものを肯定し称揚するものでもなければ、その可能性を前提するものでもない。むしろ、それが可能か否か、その条件を批判的に検証することこそが目的となる。そしてそのためのアプローチが、いわゆる「学史」である。日韓中台、それぞれの「民俗学」の来歴に光を当て、その異同をクロノロジカルにトレースすることが、本シンポにおける主な作業となるわけだ。

以上のような理由により、本シンポは必ずしも「一致」や「共感」を追及しない。むしろ、「不一致」や「違和感」を確認することのほうが、相互理解の第一歩だと考える。誤解を恐れず対話を続けていくことこそが、自らの立ち位置を見定め、新たな知的連携を可能にするための、不可欠の実践なのだ。

「東アジア民俗学」というフロンティアは、そうした対話の先に立ち現れるのかもしれない。

* * *

上記は、国際シンポジウム「東アジアの民俗学 —— 歴史と課題 ——」(2013年11月9日於

* きくち あきら 京都大学人文科学研究所

京都大学時計台記念館国際交流ホールⅢ)の趣旨説明である【図1】。「帝国日本における知識ネットワークの科学史的研究」(2012-15 科研費基盤 A: 代表者・慎蒼健 [東京理科大学]) 主催, 「昭和初期の民俗学・口承文芸研究と隣接諸科学との影響関係についての基礎的研究」(2012-2015 科研費基盤 C, 代表者・高木史人 [名古屋経済大学]) 後援により, 菊地が企画運営を担当した。日韓台中のスペシャリストたちによる議論は多岐にわたるが, さまざまな平行性や影響関係が発見され, 極めて刺激的な問題提起となった【図2・3】。

にもかかわらず, —— ここから反省文になるのだが —— その刺激的な議論を原稿化した論文集は, 菊地の不手際ゆえ, 各種出版助成へのアプライも採択ならず, 原稿



【図1】 国際シンポジウム・ポスター



【図2】 全体ディスカッション (2013年11月9日)



【図3】 参加者記念写真 (2013年11月9日)

が宙に浮くという事態を招いてしまった。人文学の論文集出版が困難にあえいでいることは今に始まった話ではないが、それにしても大失態である。早くから原稿を提出していた寄稿者諸氏に申し訳ない限り。そこで、『人文学報』の誌面をかりて特集号とすることにさせていただいた次第である。

そして、もう一つ、同様の事情で宙に浮いた原稿が合流することになった。本特集の末尾を飾る「文化人類学と戦後社会—清水昭俊氏インタビュー—」である。その経緯は記事冒頭に置かれた坂野徹による解題に詳しいが、当初の企画の想定をはるかに上回る膨大な —— にもかかわらず貴重な —— 証言を、どのように世に送り出すべきか逡巡した挙句の選択である。

「東アジアの民俗学」と題する特集に「文化人類学と戦後社会」が同居するのは一見奇妙に映るかもしれないが、結果的に、特集の奥行を深めるユニークなコンビネーションになったと編者自身は考えている。1968年前後の東京大学・文化人類学研究室を起点に語り出される清水昭俊の行動と思索は、東アジアに二つのミンゾク学（民俗学と民族学≒文化人類学）が移植される19世紀末から、グローバリズムが猛威を振るう21世紀の世界にまで及び、その論点が「東アジアの民俗学」をめぐる各論考と、さまざまなポイントで交差し響き合っていることを、通読する読者には確認してもらえらるだろう。

正直なところ、2013年にシンポジウムを企画した私が、今日私たちが直面する世界の混迷をイメージできていたわけではない。その意味で、アウト・オブ・デートな議論が含まれている可能性は否定できない。それはひとえに編者の不手際が負うべき瑕瑾だ。にもかかわらず、「対話」のための「不一致」や「違和感」の確認という2013年の出発点は、2013年以上に、現在まさに求められていることだと、編者は愚直に確信している。

その確信がどれだけ妥当か、読者の判断を待ちたい。乞御笑覧。